

ワールドカップ余聞

興奮の坩堝と化したワールドカップも漸く終わった。日本中の期待と熱気は儘く潰えたが、サッカーの盛んな国では国を挙げてお祭り騒ぎとなり、国家の明暗までも炙り出した感があった。

開催国ブラジルでは、一部の競技場施設の工事が間に合わなかったり、この機会にストを構えて労働者が待遇改善を訴えるなど、啞然とさせる現象も見られた。だが、その国民のお祭り騒ぎを何でもかんでも社会現象に結びつけてしまうあたりは、いかにもラテン系のお国柄らしい。

かつてリオのマラカナン・スタジアムを訪れ、そのスケールの壮大さに目を奪われた一方で、貧しい坂の町・サルヴァドールの道路上で、裸足のままひたむきにサッカーに夢中になっていた子どもたちの姿が忘れられない。市街地には傾斜地が多くボールを蹴っても直ぐタッチ・ラインから出てしまう。そんな悪条件をものともせず子どもたちは、ひたすらボールを追って好きなサッカーに興じていた。これだからこそ逞しいサッカー王国に成長したのだと、その時感慨深く思ったものだった。

2002年日本・韓国共同開催の折には、偶々ヨーロッパを旅行中だったが、日本がロシアを撃破した時の彼の地の異常な興奮ぶりと、好日的な反応には度肝を抜かれた。何と翌日のロンドンの新聞各紙一面に、その年の日英同盟締結100周年を祝うかのような日本の快挙を祝福する記事が大々的に掲載されたのである。自国の敗戦に怒り狂ったロシア人がモスクワ市内で暴れまわる写真とともに、あの日露戦争の日本勝利の再現との解説や、驚いたことに日本海海戦のイラストまで掲載され、北方領土問題にも日本寄りの記事が書かれていた。彼らにとっては、まさかサッカー後進国の日本が、憎きロシアを破ってくれるとは誰もが考えてもみなかった歓迎すべき椿事だったのだ。

パリへ向う鉄道‘ユーロスター’のロンドン駅待合室では、居合わせた多くの乗客から拍手で祝福され、ロシアを倒した日本はすごいと煽てられ、すっかり有頂天になってしまった。いかにサッカーがヨーロッパに根付いているかという証だけでなく、日ロ戦の勝利によって、思いも寄らずイギリスとロシアの厳しい両国外交関係まで実感させられることになった。

(近藤節夫)